

1位じゃなきゃ駄目なの？

かつて、蓮舂参議院議員が、事業仕分けの際発した、「2位じゃダメなんですか」という迷台詞を、蒸し返そうというのではありません。

先日、朝日新聞に、次のような、37歳の主婦の投書が掲載されていました。

その内容を要約すると「5歳になる一人息子の初めての運動会で、自分たち夫婦は大いに期待していた。というのも、彼は運動好きの夫婦から生まれた子だから、かけっこも1番になるだろうと思っていたからだ。ところが、結果はビリ。1番でなくても良い、最後まで走れば良いとってきたけれども、本音は1位を念じていたというわけで、最後まで走ったことを褒めてやるべきだけれども、どうしても悔しい。狙えるものなら1位を狙いたい。周りと同じ力のある子供に育てて欲しいと思うからだ。」というものです。

お母さんの悔しい気持ちが、良く伝わってきます。恐らく、想像ですが、息子さんはあっけらかんとしているのだろうな。そして、そんな息子を見て、なお悔しさがつのといたところかも知れません。

振り返ると、私も走るのには苦手で、運動会は最後まで好きにはなれませんでした。多分、お袋の期待をいつも裏切ってきたのだろうなと、ちょっと胸が痛みます。勿論、走るときは一生懸命なのですが、足が遅いというのは如何ともしがたい、というのは本人が一番自覚していることです。ですから、投書されたお母さんにも、無条件で、一生懸命に最後まで走り抜いたことを、最大限褒めてあげて欲しいと思います。

この投書に対して、二つの反応（投書）がありました。

一人目は、73歳の塾講師からのものです。「自分は病弱な親から生まれ、競争では1位になったことはない。入賞の経験もなく、運動会で賞状を見て談笑する親子を見るのがいやだった。運動好きのご夫婦なら、息子さんの素質を開花させる能力もあるだろうから、上手な指導でお子さんの力をアップさせることも可能ではなかろうか。また、体育以外にも人生には様々な能力を発揮す

る機会があるから、長所を見つけそれを伸ばしてあげたいものだ。」

もう一人は53歳の主婦からのもので、「我が家の一人息子が、幼稚園の運動会で見せた姿は凄かった。凄い集中力で、結果はぶっちぎりの一位。この子はきっと将来大物になり、何かやってくれるに違いないと、誇らしく思っていた。それから月日は流れ、現在の息子は、やっと入った大学もバンドにうつつを抜かし、就活どころか単位を取るのに必死の有様。これからどうするつもりか。今、ハッキリと思う。かけっこが1位でもダメなんです。」

「かけっこが1位でもダメ」という言葉には、多分、「オリンピック選手になれるぐらいの力がないと世の中には通用しない」という思いと、「人間には、かけっこだけではなく、人間としての幅広い力が必要では」という思いが、重なっているように感じます。

子どもが内に秘めている力は、多様です。子どもの発達段階に応じて、如何にその力を引き出し、伸ばしていくか、それは、その子の親、そして教師の大きな役割です。

もっとも、「我が子には凄い才能があり、こんなものではないはずだ、と思い続けている内に歳月が過ぎてしまった」というような話も、良く耳にする事ではあります・・・。(塾頭 吉田 洋一)